

上ノ平遺跡

平成23年度南小河内区水道管設置工事に伴う
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

2012年

長野県上伊那郡箕輪町教育委員会

序

箕輪町は伊那谷の北部にあり、豊かな自然に恵まれた、歴史と文化のある町です。先史の頃よりこの地の生み出す自然の恵みを求めて人々が暮らし始め、各時代を生きた先人達の努力によって今日の町の姿が築き上げられてきました。町内には、彼らが残した証である多くの遺跡が残されています。

今回調査対象となった上ノ平遺跡は、町内でも数多くの遺跡が存在する天童川左岸の山麓に位置し、地域の皆さんにより、今まで大切に伝えられてきました。このうち、上ノ平城跡は、昭和44年に長野県史跡に指定され、箕輪町を代表する城跡の一つとして今日に至っています。

現在は、地元南小河内区の皆さんにより「上の平城跡の会」が組織され、整備・保存が行われています。今回、城跡の整備維持活動の一環として、遺跡内に水道を設置することとなり、町教育委員会が工事に先行して発掘調査を実施しました。その結果、上ノ平城跡の歴史を知る上で、貴重な資料を得ることができました。また、それと同時に、今まで伝えられてきた城跡の大切さを改めて実感することができました。

今回の調査は、僅かな調査範囲であったことから、明らかになった情報には限界がありますが、調査で得ることのできた情報をできる限り記したつもりであります。本書を広く活用いただく事で、城跡の歴史解明の一助となり、今後の整備・活用のための資料となれば幸いです。

最後になりましたが、今回の調査の実施にあたり、ご理解・ご協力をいただきました地元南小河内区の皆様をはじめ、ご指導いただきました先生方、そして暑い中をご尽力いただきました調査関係者の皆様方に、本書の刊行をもちまして心から感謝申し上げます。

箕輪町教育委員会

例　　言

- 1 本書は、平成23年度に実施した、長野県上伊那郡箕輪町大字東箕輪2,831番地他に所在する、上ノ平遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の発掘調査及び整理作業等の記録保存業務は、箕輪町教育委員会が実施した。
- 3 本書の作成にあたり、作業分担を以下のとおり行った。
遺物の洗浄・注記・実測・トレースー井沢はずき、大串久子、根橋とし子
遺構図の整理・トレース・挿図作成ー井沢はずき
写真撮影・図版作成ー柴　秀毅、井沢はずき、征矢進、征矢卓巳
- 4 本書の執筆・編集は、柴　秀毅、井沢はずきが行った。
- 5 発掘箇所の記録は、世界測地系座標により位置を落とした。
- 6 出土遺物及び図版類は、すべて箕輪町教育委員会が管理し、箕輪町郷土博物館に保管している。
- 7 調査及び本書の作成にあたり、下記の方々並びに機関にご指導ご協力をいただいた。記して感謝申し上げる。
上田厚男／遠藤寛一／河西克造／金沢阿利／金子郷之／小林堅良／竹入春江／
寺内隆夫／根橋英夫／南小河内区／上の平城跡の会／(財)長野県埋蔵文化財センター／
長野県教育委員会

凡　　例

- ・挿図の縮尺は、各図の下部に表記（スケールを有するものも含む）した。
- ・遺構実測図中におけるスクリーントーン及び記号による表示は、以下のものを表す。
 -石
 -陶器
- ・土器実測図及び拓影図中のスクリーントーン表示は以下のものを示す。
- ・土層の色調は、『新版 標準土色帖』を用いて記してある。
- ・石器の法量は現存する数値を示してある。

本文目次

序

例言・凡例

本文目次

挿図目次・表目次

第1章 発掘調査の概要

第1節 調査に至る経過 1

第2節 調査概要と体制 2

第3節 調査の経過 2

第2章 遺跡の環境

第1節 地形と地質 4

第2節 周辺の歴史的環境 4

第3節 遺跡の概要 6

(1) 原始・古代の遺物 6

(2) 上ノ平城跡 6

第3章 発掘調査の結果

第1節 調査方法 8

第2節 土層堆積状況 11

第3節 調査結果

(1) 1トレンチ 12

(2) 2トレンチ 12

(3) 3トレンチ 15

(4) 遺物 15

第4章 総括 18

参考・引用文献

写真図版

報告書抄録

挿 図 目 次

- 第1図 調査位置図
- 第2図 上ノ平遺跡平面図
- 第3図 周辺遺跡分布図
- 第4図 調査区トレンチ設定図
- 第5図 基本層序図

- 第6図 1トレンチ実測図
- 第7図 陶器・石器実測図
- 第8図 2トレンチ実測図
- 第9図 3トレンチ実測図
- 第10図 上ノ平城跡遺構推測図

表 目 次

- 第1表 周辺遺跡一覧表

第1章 発掘調査の概要

第1節 調査に至る経過

上ノ平遺跡のある南小河内区は、天竜川左岸段丘上、東方の山麓から流れる沢川によって形成された扇状地に位置している。この遺跡は、古くから多くの遺物が出土する場所として、地域の子どもたちの絶好の土器拾いの場所であった。また、遺跡にある上ノ平城跡は、東の山裾から西方に延びた丘陵上に立地し、眺望もよく、伊那谷を俯瞰できる場所にある。

上ノ平城跡では、城跡の内容を把握するための発掘調査が過去3回行なわれ、二の堀・土塁・礎石建物址などの遺構や、瀬戸美濃陶器・内耳鍋・カワラケなどの遺物が出土している。これらのことから、当城跡は戦国時代（特に15世紀中頃から16世紀中頃にかけて）に機能していた城であることが明らかになり、伊那谷の戦国期を知る上でも貴重な城跡であると思われる。

現在上ノ平城跡は、地元「上の平城跡の会」によって、整備・管理が行なわれている。こうした活動の中で、地元から利用者の利便性向上のため水管設置の要望が出され、用地が長野県史跡の範囲は外れているものの、埋蔵文化財の包蔵地に当たることから、保護処置について県教育委員会文化財・生涯学習課と町教育委員会の間で協議を行なった。その結果、文化財の破壊が余儀なくされる約80m²を対象に、発掘調査による記録保存を行なうこととなった。業務は町教育委員会が実施する事となった。



第1図 調査位置図 (1:50,000)

第2節 調査概要と体制

- 1 遺跡名 うなづかひら
上ノ平遺跡
- 2 所在地 長野県上伊那郡箕輪町大字東箕輪2,831番地他
- 3 事業期間 平成23年7月21日～24年3月23日
(発掘調査 23年7月21日～23年10月7日)
(整理作業 23年8月20日～24年3月23日)
- 4 事務局
教育長 小林通昭
博物館長 中村文好
文化財係 有賀 治、柴 秀毅(箕輪町郷土博物館 学芸員)
臨時職員 中村孝子
- 5 調査団
調査団長 小林通昭
調査副団長 中村文好
調査担当者 柴 秀毅
調査団員 井沢はずき、伊藤輝彦、今岡貞夫、大串 進、小川陽三、唐澤清光、小坂静音、
中村孝子、堀川利平、松崎伸子(※50音順)

第3節 調査の経過

- 7月21日 重機にて表土剥ぎ。
- 25日 造構上面確認作業。調査区の東側・中央・西側にトレーナーを設定し、1・2・3トレーナーとする。
- 26日 2・3トレーナーの掘り下げ、写真撮影。
- 27日 2トレーナー測量、1・3トレーナー掘り下げ。
- 29日 1トレーナー掘り下げ。3トレーナー写真撮影・測量。
- 8月8日 1トレーナー写真撮影・測量。
- 9日 県教育委員会の寺内氏視察。
- 10日 道具片付け。
- 11日 県埋蔵文化財センターの河西氏視察、一旦調査終了。
- 23日 BM測量、埋め戻し。
- 26日 埋め戻し、一旦調査終了。
- 10月7日 1トレーナー東側立会い調査。調査終了。



第2図 上ノ平遺跡平面図

第2章 遺跡の環境

第1節 地形と地質

箕輪町は、東は南アルプス、西は中央アルプスにはさまれた、南北70kmにも及ぶ伊那盆地（通称「伊那谷」）の北部に位置している。また、諏訪湖を源とし、盆地の中央低地帯を南に流れる天竜川によって、町はほぼ二分された形となっている。このうち、天竜川の東側に位置する竜東地区は、守屋山（標高1650m）をはじめとする伊那山地の主稜線からの水を集めて流れ来る沢川が天竜川に合流している。

沢川の左岸には、広い長岡地区的扇状地が発達している。また、沢川の右岸には南小河内地区的扇状地があるが、長岡地区的扇状地に比べると小規模で標高も低い。この扇状地の東側に、上ノ平遺跡のある段丘状の地形がある。これは、沢川の支流にあたる寺沢川が作った扇状地で、扇状地形成後に、沢川・知久沢川等によって周りが浸食されて、現在みられるような馬の背骨の段丘地形になった。標高は、西側の末端部で740m、東側の扇頂部で790mであり、天竜川との比高は60m、沢川との比高は40mを測る。水害に遭う恐れがなく、日当たりの良いこの場所は、原始・古代の頃から人々の生活の場となり、中世には、こうした天然の要害となる地形を利用して、城が築かれたものと思われる。

地質については、竜東地区では、基盤層を覆っている被覆層が比較的浅く断片的であるため、支流の川沿いには基盤層が多く露出し、天竜川まで続いている。遺跡の北側において、過去に実施された地質調査では、基盤層の上には、上位から黒色土層、褐色火山灰土層、軽石層が確認された。

第2節 周辺の歴史的環境

箕輪町は、東西の複合扇状地を流れる中小河川や段丘下の湧水など、水資源に恵まれており、先史より人々が暮らしやすい好適な場所が多い。町内には、先人達が残した足跡ともいいくべき多くの遺跡が残されており、平成6~8年度に実施した箕輪町遺跡詳細分布調査では、包蔵地182箇所、古墳27基、城跡13箇所を確認している。

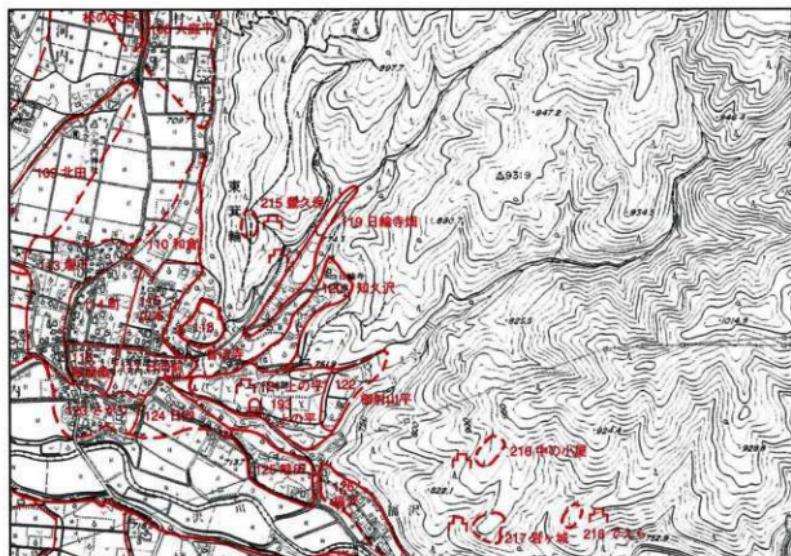
このうち、天竜川左岸の竜東地区は、東の山裾から天竜川に至るまでの距離が比較的短く、いずれの場所も、水資源までの距離がさほど遠くないため、そのほとんどが遺跡地帯となっている。特に、上ノ平遺跡のある東箕輪地区は、町内屈指の遺跡地帯であり、包蔵地55箇所、古墳12基、城跡7箇所を数える。

山裾の段丘上に位置する上ノ平遺跡（121）は、旧石器・縄文・古墳・平安・中世・近世の複合遺跡で、特に中世については、これまでの調査で、戦国時代の遺物や、塙・土塁・礎石建物址などの遺構が確認されている。上ノ平遺跡の背後には、豊久保（215）、中の小屋（216）、岩ヶ城（217）、でえら（218）など、多くの山城が存在し、上ノ平城との関連性が推測される。また、付近には、日輪寺、普濟寺などの古刹もあり、歴史的環境は良好である。

上ノ平遺跡の一段下、南小河内地区的扇状地には、堰下（113）、町（114）、山本（115）、殿屋敷（116）、日向（117）などの遺跡があり、沢川の右岸には、さがり（123）、日向（124）、畔田（125）、福沢（126）といった遺跡もある。また、上ノ平遺跡の北側には、普濟寺（118）、日輪寺（119）、知久沢（120）の各遺跡がある。このうち普濟寺遺跡では、過去の調査により、中世の火葬墓が見つかっている。

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代						立地	地目	備考	
			旧	縄	弥	古	奈	平				
121	上ノ平	南小河内	○	○	○	○	○	○	台地	畠・荒地	県史跡 調-平11・12年	
109	北田	"		○				○	○	段丘末端	宅地・田	調-平4・16年
110	和倉	"					○	○	扇頂	畠		
113	坂下	"		○			○	○	扇頂	宅地・畠・田		
114	町	"		○			○	○	扇尖	宅地・畠	調-平20年	
115	山本	"		○			○	○	扇頂	宅地・畠	調-平20年	
116	殿屋敷	"		○			○	○	扇尖	宅地・畠		
117	白向原	"		○			○	○	扇頂	宅地・畠	調-平20年	
123	さがり	"		○			○	○	扇尖	宅地・畠・田		
118	普濟寺	"		○				○	○	台地	宅地・畠	調-昭63・平11年
119	日輪寺畠	"		○		○	○	○	台地	宅地・畠・荒地		
120	知久沢	"		○			○	○	扇頂	宅地・畠		
122	御射山平	"			○			○	○	台地	畠	
124	白向	"		○	○			○	扇頂	田		
125	畔田	"		○			○		扇頂	畠・田		
126	福沢	"		○	○			○	扇頂	宅地・畠		
215	豊久保	"						○	山頂	林		
216	中の小屋	"						○	山頂	林		
217	岩ヶ城	"						○	山頂	林		
218	でえら	"						○	山頂	林		

第1表 周辺遺跡一覧表



第3図 周辺遺跡分布図 (1:12,500)

第3節 遺跡の概要

(1) 原始・古代の遺物

上ノ平遺跡は、南はわずかの平地を隔てて沢川に臨み、北には知久沢川が流れている。地形は東南に傾斜して日当たりが良く、生活の場としては適地であったと思われる。この遺跡において、原始・古代の人々が残した遺物は、これまで多数採取されてきている。特に、南小河内区の郷土史家であった故大機幹氏は、ここで多くの遺物を採取し、これを保管・分類している。

土器類では、縄文早期の押型文をはじめ、中期初頭・中葉・後葉などの土器片が多く見つかっている。特に中期後葉では、唐草文Ⅱ～Ⅲ式の深鉢(器高56cm)が出土している。また、過去の発掘調査では、繩文土器片の他に、古墳時代の須恵器や、平安時代(9世紀、10世紀後半～11世紀前半等)の土師器・須恵器・灰釉陶器などの破片も見つかっている。さらに石器類では、石鎌・石匙・スクレイバーなどの道具や、装身具が出土している。こうしたことから、この一帯は古くから人々の生活の場であったものと思われる。しかし、遺跡の大半が上ノ平城跡の指定範囲と重なるため、多くが中世以後の遺構の下になっているものと思われるため、詳細は不明である。

(2) 上ノ平城跡

上ノ平城跡は、東西約450m、南北約200mの規模を測り、その主要部は、南北に連なるとされる五条の堀によって区画される。郭は、西から「二の郭」「一の郭(主郭)」「三の郭」「四の郭」となっており、このうち、「三の郭」と「四の郭」は、東西約180mにわたる堀(?)により、南北に分けられる。

近年の史跡整備に先駆けて、平成10～12年度にかけて、城跡の内容を把握するための発掘調査が実施された。その結果、これまで推定であった「二の堀」の存在が確認され、「四の堀」は確認することができなかった。「二の堀」は、掘上面の幅6.0～6.8m、「二の郭」からの深さ2.1～2.3mを測り、主郭からは5m以上の深さがあったものと思われる。断面は鮮やかなV字状であった。主郭においては、現地表面の下に中世の生活面があることが確認され、これに伴う遺構として、少なくとも三方を周ると思われる土塁や、礎石建物址、「二の郭」へ続くと思われる出入口遺構(門)などが確認された。このうち出入口遺構周辺では、焼土や炭化物、石などが多く確認されたことから、何らかの理由により焼失し、その後出入口を破壊するなどの目的によって意図的に石を投棄した可能性が考えられた。出土遺物としては、カワラケ・内耳鍬などの在地産土器、瀬戸美濃系を主体とする国内産陶器、中国龍泉窯系の輸入磁器などが確認された。これらの出土遺物から、上ノ平城跡の最終使用年代は15世紀中頃～16世紀中頃と思われ、その最終段階において、何らかの理由により一部焼失したものと考えられる。なお、築城時期等、それ以前のことについては不明である。

次に、上ノ平城、及び同城がある小河内に關係すると思われる文献史料の記述をみてみたい。小河内の地名が最初に見えるのは、長享2年(1488)の諏訪社下社春宮及び秋宮造営古帳を天正6年(1578)に写した『春秋之宮造営之次第』(『信濃史料叢書』)である。この中に、樋口、長岡とともに小河内の記述が見えることから、遅くとも長享2年には小河内集落が在ったことがわかる。次に、慶長16年(1611)に、当時飯田藩の領主であった小笠原秀政の重臣二木重吉が、主君の諧問に応じて小笠原長時・貞慶二代に仕えた当時の追憶を記録して上進した『二木家記』(『信濃史料叢書』)の、武田氏の箕輪攻めの記述の中に、福与城に籠城した藤沢頼親の侍衆として、近隣の松島、大山、長岡などとともに小河内という記述がみられる。このことから、当時の小河内は、藤沢頼親の支配下にあったことがわかる。箕輪郷が徳川家康の飯田城代菅沼定利の支配下にあった天正12年(1584)から天正17年(1589)の期間

中、皆沼定利は、天正12年に小河内の普濟寺あてに所領安堵状『普濟寺文書』を、同14年（1586）には小河内の測井氏あてに所領安堵状『測井文書』を出しているが、城に関する記述は見られない。また、天正17年（1589）11月には、当時箕輪郷の領主であった貞田信幸が、配下の武将に小河内の地を宛がっているが、やはり城に関する記述は見られない（『長岡寺殿御事蹟稿』）。

江戸時代に入り、延享3年（1746）に、箕輪郷の関盛胤が伊那郡各郷村の変遷を記述した『伊那温知集』（地誌）には、南小河内の記述として、「古城あり、天文の頃阿部修理亮住す。天正七年正月卒す。法名天長応全。同じ頃、淵井市左衛門住す。天正中皆沼大膳亮よりの軍触書簡に有り」と記されている。ここに記された古城が上ノ平城跡のことかどうかは分からぬが、その城には、天文の頃阿部修理亮なる人物が住んでいたことが記されている。また、文化9年（1812）に、当時箕輪郷大出村で医師として活躍していた中村元恒が、伊那郡の彌城、風俗、仏寺などについて記した『伊那志略』（『信濃史料叢書』）には、小河内氏宅の記述として、「名字不詳、里老いわく藤沢頼親麾下の上、天文中福与城において戰死云々未詳」という記述が見られる。なお、中村元恒は、このほかに『箕輪記』なども著述している。

明治に入ると、時の政府は廢藩置県に伴って新たにできた各府県に国史編輯局を設置させ、郷土誌、郷上史ともいるべき事業を起こした。長野県でも、県庁内に国史編輯局を置き、政令からおよそ10年かけて、県内の各町村から地誌の提出をもとめた。この時提出した資料は、残念ながら大正12年の関東大震災で焼失してしまったが、長野県では町村から提出された資料が原本のまま保存されていたため、そこに記された内容を知ることができる。これらの資料は、明治11年（1878）から16年（1883）頃に記述されたものと思われるが、このうち東箕輪村の中には“上ノ平城廬”的記述として、「旧南小河内の東にあり。一に呼んでいわく、丸山城。昔時、右大將頼朝天下平均し玉う頃、建久三壬子八月、知久左衛門入道行性建築の城たり。今に至って外堀、内堀、大石これ有り。鎮守社、馬場地形尚存せり。方今總て耕地の處多し。」と記されている。その後、上ノ平城跡について、詳細な調査、及び所見の記述を行なったのは市村咸人氏である。同氏が調査を行なった『長野県史蹟名勝天然記念物調査報告書第16集』（昭和10年）には、「平安時代末に源満快の曾孫為公によって始めてこの地に造築され、以來子孫が此處を根拠に栄えたと伝えるが明白でない。しかし、鎌倉時代中期には源氏と同族の知久氏の拠るところとなり、教俊の子信貞が知久郷に移るまでは当城の存続していたことは明らかである。」、「知久氏退去後この城は他者の使用することができなかったため、旧遺構を伝えている点で貴重な存在である。」と記されている。

また、平成に刊行された冊子であるが、日本家系家紋研究所が刊行した『藤沢一族』という冊子がある。これは、全国の藤沢という名字の氏族のうち、主な三系統について、その由来や家系図などを記したものである。この中には、戦国時代の箕輪領主（福与城主）である藤沢頼親の一族についても記してあるが、この系図の中には、頼親の四代前に分かれた兄弟（一族）として、小河内に分かれた人物（某）が記されている。

こうした史料から、小河内においては、鎌倉時代には源氏と同族の知久氏（神氏）が居住していたと思われる。知久氏は、日輪寺や八幡社（現小河内神社）を造営したとされているが、その居住施設が上ノ平城跡であったかについては不明である。また、戦国時代には、箕輪郷の領主である藤沢頼親に関係すると思われる人物が小河内に居り、その人物の居城が上ノ平城跡であった可能性が考えられるが、詳細は不明である。しかし、過去の発掘調査により、15世紀中頃～16世紀中頃にかけて上ノ平城跡が使用されていたことが明らかになっていることから、藤沢頼親と関係のある在地領主が、上ノ平城跡を拠点に活動していた可能性は高いものと思われる。いずれにしても、史料が少なく不明なため、今後更なる検討を要する。

第3章 発掘調査の結果

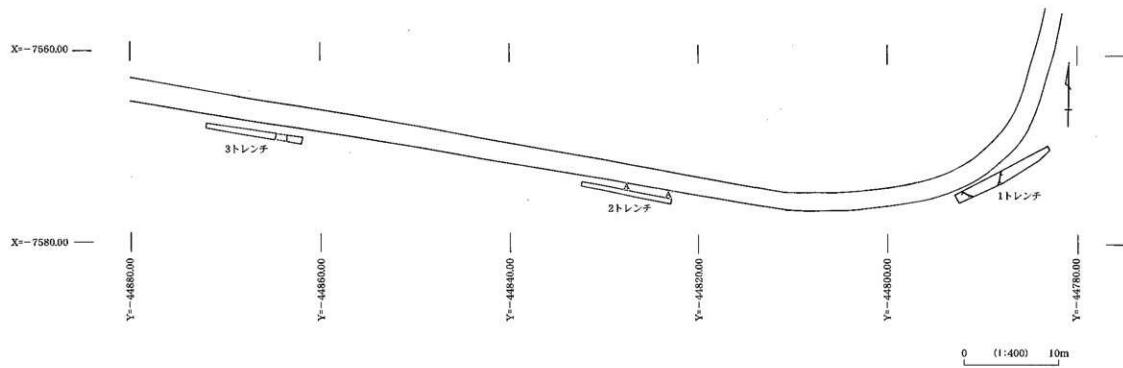
第1節 調査方法

今回の水道管設置工事は、既存の水道管から水を取水し、「三の郭」付近にある仮設トイレ付近まで敷くというものである。取水元の水道管は、城跡の北東にある配水池を源とするもので、配水池から約100mは西へ向かい、そこから南に曲がって150mほど流れ、段丘下の福沢集落へと続いている。今回の工事は、この管が段丘を下る直前、主郭から約190m東方の場所から取水し、西へ約100mほど新規に設置するというものである。

当該地（既存舗装道路の南側）は、長野県史跡の範囲には含まれていないものの、上ノ平遺跡の範囲に含まれていることから、建設面積約80m²の全てを調査対象とした。しかし、設置に伴う掘削の幅は、底部で約60cm、上部で約80cmと狭小であり、立地も主に斜面である。そのため、遺構・遺物が出土する可能性は低いものと考えられたが、推定「五の堀」付近にあたることから、主に城の堀の有無を確認することを目的として、発掘調査を行なうこととした。

調査にあたっては、主に城跡の調査となることから、事前に長野県埋蔵文化財センターの河西克造氏に現地を視察していただき、指導を賜った。その結果、安全面から全面を調査する事は困難であり、推定「五の堀」、及び推定「四の堀」にあたると思われる箇所と、その中間箇所において、遺構の有無の確認と遺物の採取を目的として調査を行なうこと、また水道の取水箇所においては、工事に際して立会調査を行なうこととした。そのため、工事に先立ち、東から1~3トレンチを設定し（第4図）、重機で耕土を掘削した後、手作業で掘削、検出を行ない、遺構・遺物の確認を行なった。なお、掘削の深さは、工事の深さである60~80cm以内とし、テフラの漸移層までで遺構が確認されない場合は、テフラ層まで掘り下げることとした。また、1~3トレンチ以外の箇所においても、重機で耕土のみ除去し、それより下層については、工事立会を行なうこととした。

記録作業のうち、写真による記録は、一眼レフデジタルカメラ撮影と、35mm一眼レフカメラによるリバーサルフィルム撮影を行なった。



第4図 調査区トレーンチ設定図

第2節 土層堆積状況（第5図）

上層の堆積状況は各トレンチで異なる。特に1トレンチでは、「五の堀」及び「四の郭」の半場が確認されたため大きく異なるが、2・3トレンチの土層堆積状況は、概ね同様であった。ここでは2トレンチを参考に、調査箇所の土層堆積状況について記したい。

調査地は、舗装道路の路肩として使用されていたため、表面に人為的に置かれた礎混じりの盛り土が10~30cmの厚みで堆積していた。その下には、暗褐色土（II層）、黒褐色土（III層）、暗褐色土（IV層）、黄褐色土のローム（テフラ）層の4層に分けられる。各層の詳細は以下のとおりである。

I層 人為的に置かれた礎混じりの盛り土。締り・粘性ともに弱い。

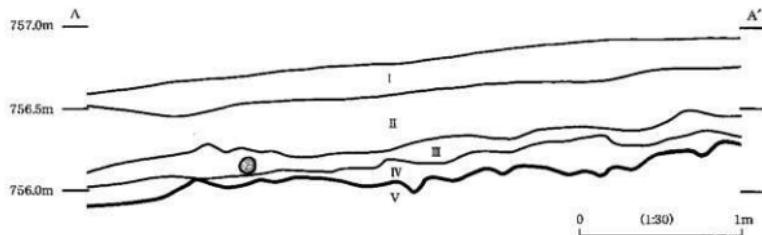
II層 10YR3/3（暗褐色）ローム粒子を1~5%含む。締りは強く、粘性は中。道路建設に際して置かれた盛り土と思われる。

III層 10YR2/2（黒褐色）ローム粒子を5%含む。締り・粘性共に中。

IV層 10YR3/4（暗褐色）ローム粒子を50%含む。ローム（テフラ）層の漸移層。締り・粘性共に中。

V層 10YR5/8（黄褐色）ローム（テフラ）層。締り・粘性共に中。

なお、3トレンチでは、III層は確認されなかった。



第5図 基本層序図

第3節 調査結果

(1) 1トレンチ(第6図)

①土層堆積状況

1トレンチでは、「五の堀」の有無を確認することを主目的として調査を行なった。トレンチの西半部では、道路造成時の盛り土(1層)の下に、暗褐色土(2層・3層)、黒褐色土(7・8層)、暗褐色土(9層)、黄褐色土(10層)を確認した。このうち9層はローム(テフラ)層の漸移層、10層はローム(テフラ)層で、概ね他のトレンチと同様の状況であった。一方、トレンチの東半部では、後述するように、「五の堀」の斜面と思われる落ち込みを確認した。そのため土層の堆積状況も、他の2つのトレンチとは少し異なる様相であった。1～3層までは西半部と同様であるが、その下に、厚さ15～50cm以上になると思われる黒褐色土(4・5層)を確認した。これらの2～5層は、いずれも濃い暗褐色か黒褐色をしており、締りも強く、土の状態も安定しているように見えた。そのため、当初は堀が埋まった段階で堆積した土(後世の耕作土)、又は城の第二段階の構築土ではないかと考えた。しかし、後日行なった既存の水道管から取水する際の工事立会いでは、地表面からの深さが約140cmの安定した黒褐色土中において、既存の水道管が設置されているのを確認した。そのため2～5層は、いずれも既存の水道管設置後に埋められた盛り土であることが判明した。土の中に混合物がほとんど無いことから、段階的に埋められたものではなく、一気に埋められたものと思われる。

②五の堀

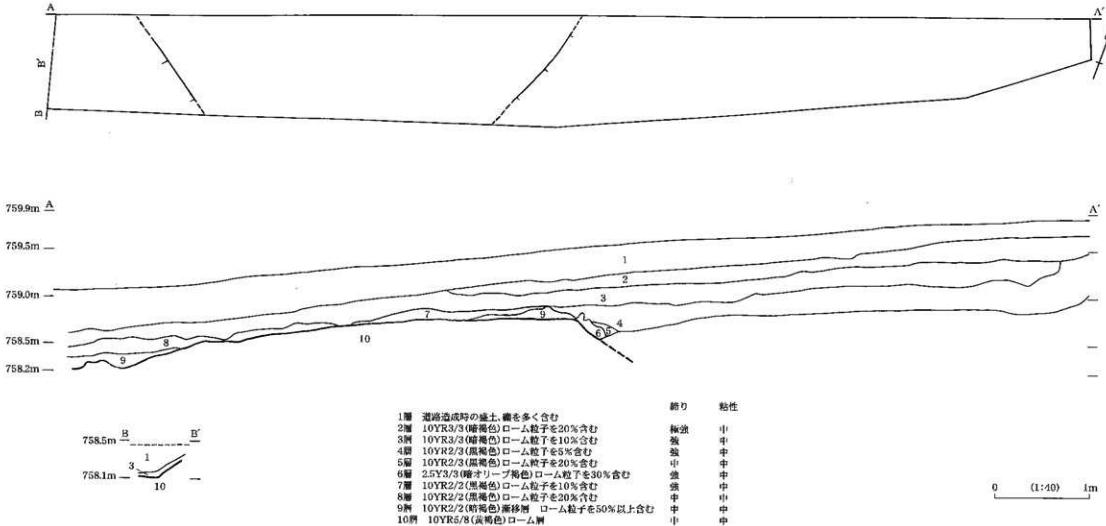
1トレンチの中央付近から東側に向かって、ローム層(テフラ層)を掘り込んだ斜面と思われる箇所を確認した。この場所は、推定「五の堀」の西端とほぼ同じ位置にある。堀上面からの堀り込みの角度はおよそ30～35度で、平成11年度に調査を行なった「二の堀」の角度とほぼ等しい。また、堀の上面幅は約6.0mと推測される。「二の堀」の上面幅は6.0～6.8mであり、同様にローム層(テフラ層)を掘り込んでいる。また、水道管取水に伴う工事立会いでは、「五の堀」の東側と思われる斜面を確認する事ができた。こうした事から「五の堀」は、「二の堀」と同様にV字状を呈しているものと思われる。

③四の郭

「五の堀」の西側では、僅かな面積ではあるが、「四の郭」の平場らしき箇所が確認された。平場の東側は「五の堀」の斜面へと続き、南側も一部斜面となっているため、「四の郭」の南東隅にあたる場所と考えられる。また、土層堆積状況から、7・8層の上面が「五の堀」に伴う中世の生活面であると思われる。一部に9層(ロームの漸移層)が無いことから、一度ローム層まで削り、その上に生活面を構築したものと思われる。なお、土壘やピットなどの遺構は確認できなかった。

(2) 2トレンチ(第7図)

2トレンチの上層堆積状況は、上層から、道路造成時のものと思われる盛り土(1層=I層)、暗褐色土(2層=II層)、黒褐色土(3層=III層)、暗褐色土であるローム(テフラ)の漸移層(4層=IV層)、ローム(テフラ)層(5層=V層)となっている。このうち1層は明らかな人為的堆積土であり、4・5層は自然堆積土と思われる。また、漸移層の上の3層(黒褐色土)は、中世又はそれ以前の生活面と考えられる。2トレンチの箇所は、「四の郭」(舗装道路の北側／平場)から南へと下がる斜面の途中であると思われ、舗装道路の建設にあたっては、「四の郭」の一部を削って、その南側の斜面に盛り、水



第6図 1トレンチ実測図

平に近い道路を建設したものと思われる。そのため2層は、道路を作る際に盛った造成土（四の郭方面を削った土）ではないかと思われる。なお、遺構は無かった。

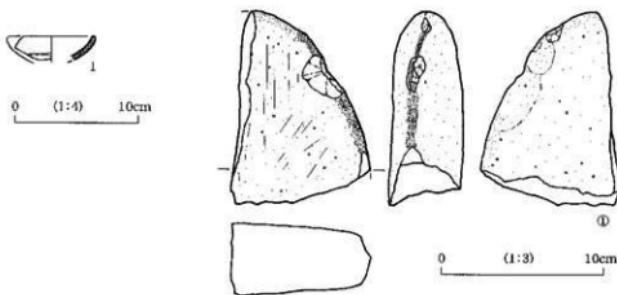
（3）3トレンチ（第8図）

3トレンチでは、「四の堀」の有無を確認することを目的として調査を行なった。土層堆積状況は、上層から、道路造成時のものと思われる盛り土（1層=I層）、暗褐色土（2層）、暗褐色土（3層）、ローム（テフラ）層（4層=V層）となっている。2トレンチと同様に、1層と2層は道路建設時の盛り土、4層は自然堆積土（ローム層）であるが、2トレンチで確認された黒褐色土は存在しなかった。3層の暗褐色土についても、その堆積状況から自然堆積土ではなく、崩落土か造成土であるものと思われる。

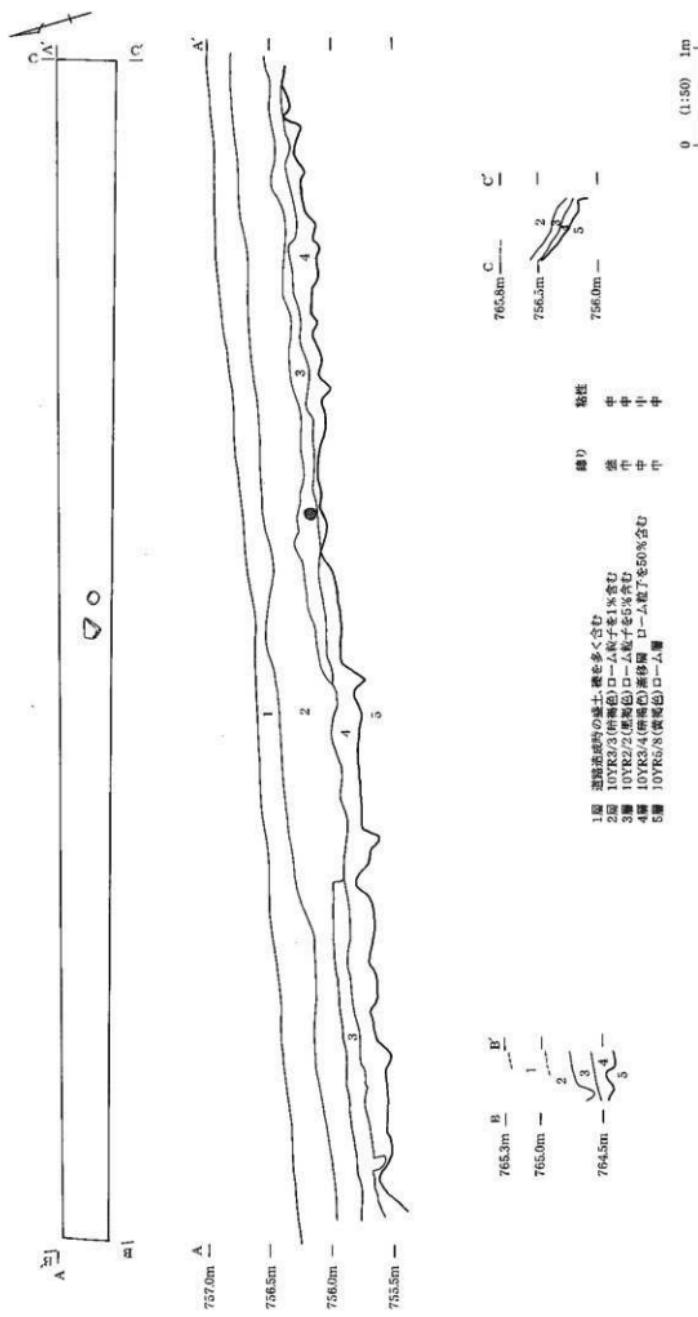
3トレンチ西側の傾斜角度は約50度を測り、2トレンチよりもかなり急な斜面であることから、こうしたことが上層の堆積状況に影響しているものとも考えられる。なお、今回の調査では、「四の堀」の痕跡は確認できなかった。

（4）遺物

調査面積が僅かであるため、出土した遺物も極めて少ない。また、遺構に伴う遺物は無く、多くが表面採取、又は上面確認で得たものであった。内訳は、黒曜石の破片14点、石器片1点（台石①、長さ9.0cm、幅8.5cm、重さ510g）、土器片9点（うち内耳鍋1点=1トレンチ）、陶器片2点で、このうち図化できたものは1点（1）のみであった。いずれも上ノ平遺跡では、過去の調査で多く出土している縄文時代・平安時代・中世・近世の遺物であり、当遺跡の主体が、これらの時期であることを示している。



第7図　陶器・石器実測図



第8図 2トレンチ実測図

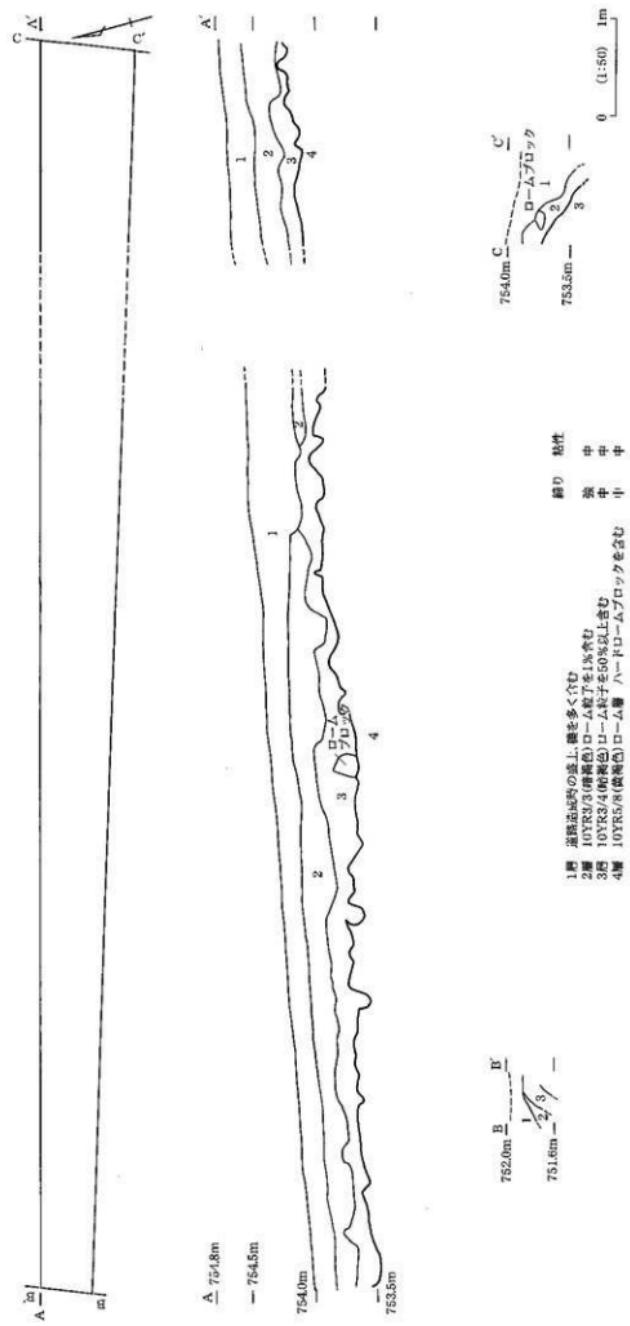


図9 図 3 トレンチ実測図

第4章 総括

今回の発掘調査は、対象面積が100m²に満たない僅かな範囲の中ではあったが、一定の成果を得ることが出来た。ここでは、これまで各章で述べてきたことをまとめる形で総括したい。

中世の上ノ平城跡については、「五の堀」の存在を確認できたことは大きな成果であった。上ノ平城跡は、東側の高所から西側の低所へと伸びる段丘状の地形を切る形で、西から一～五の堀までの五条の堀があったとされている。このうち現況の地形で堀と確認できるのは、「一の堀」と「三の堀」の北側半分であり、平成11年度に行なった発掘調査では「二の堀」を確認することができた。「五の堀」については、現況の地形では北側三分の一にあたると思われる箇所に堀状の窪みを確認できるが、これは、「三の郭」と「四の郭」を南北に区切る縦状の堀（近世・近代の馬入れ道）？の延長線上にあるため、明確に「五の堀」とはいえない状況であった。しかし、今回の調査で「五の堀」の存在を確認できたため、これまでの推定どおり、「四の郭」と、その東側の平場（小字御射山平）を区切る形で、「五の堀」が存在するものと思われる。推測される上面幅は約6.0mで、「二の堀」と同様の規模であったと思われる。また、「五の堀」の西側には、「四の郭」と思われる平場の端部が確認された。既存の水道管から取水する工事の立会調査では、地表面下約140cmの黒褐色土の中から水道管を確認した。中世の生活面を覆うこれらの土は比較的安定しており、一見すると盛り土とは思えないような土であった。この水道管は、今回の調査箇所の少し手前（北側）で、舗装道路を横断する形で埋設されている。道路の建設は昭和40年代ではないかと思われるが、今回の土層堆積状況とあわせて考えると、水道管設置前に自然の窪みとして残っていた「五の堀」の上面に水道管を置き、周辺の土を削って一気に「五の堀」を埋め、その後で道路を建設したものと推測される。なお、既存の水道管を探す過程で、一部「五の堀」東側の平場（小字御射山平）を掘削した際、その土層はローム（テフラ）層も含め、大きく削られたような様相であった。そのため、既存水道管設置の際、土に「五の堀」東側の高所（小字御射山平）を削って、「五の堀」を埋めたのではないかと推測される。また、平成11年度の調査では確認出来なかった「四の堀」については、今回の調査でも確認できなかった。そのため「四の堀」については、断定はできないが、その存在に疑問符がつく。

中世以外では、土器片や石器片などが確認できたことから、本遺跡は、これまで考えられている通り、縄文時代や平安時代の痕跡を多く残す、良好な遺跡であると思われる。

本書の末筆にあたり、本事業に御理解・御協力をいただきました、土地所有者の皆様、地元南小河内区の皆様、ご指導・ご助言を賜りました先生方、そして、真夏の暑い中作業にご尽力いただきました調査関係者の皆様に、心より御礼申し上げます。



第10図 上ノ平城跡遺構推測図

参考・引用文献（著者名50音順）

伊那毎日新聞社	1976	『上伊那郡町村誌』
上伊那誌編纂会	1970	『上伊那誌』第四卷人物編
信濃史料刊行会	1960	『信濃史料』第十五卷
信濃史料刊行会	1972ほか	『新編信濃史料叢書』第二卷、第八卷
下伊那教育会	1981	『市村成人全集』第十巻
武田光弘	1997	『藤沢一族』
長野県史刊行会	1988	『長野県史 考古資料編』第一巻（四）遺構・遺物編
箕輪町教育委員会	1997	『箕輪町遺跡詳細分布調査報告書』
箕輪町教育委員会	2001	『上ノ平城跡』
箕輪町教育委員会	2009	『上の林遺跡』
箕輪町教育委員会	2010	『一の宮遺跡』
箕輪町誌編纂刊行委員会	1986	『箕輪町誌』歴史編

写 真 図 版



調査前（西から）①



調査前（西から）②



調査前（五の堀付近・東から）



作業風景



工事後（西から）①



工事後（西から）②



工事後（取水地点付近）



工事後（水道蛇口付近）



1 レンチ（東から）



1 レンチ断面



四の郭と推測される平場（1 レンチ）



五の堀の落ち込み（1 レンチ）



五の堀断面



取水工事立会い状況①



取水工事立会い状況②



既存水道管確認状況



2 トレンチ（東から）



2 トレンチ断面東側



2 トレンチ断面西側



3 トレンチ（東から）



3 トレンチ断面東側



3 トレンチ断面西側



出土石器片



出土陶器片



出土土器片



出土黑曜石片

報告書抄録

ふりがな	うえのたいらいせき							
書名	上ノ平遺跡							
副書名	平成23年度南小河内区水道管設置工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
著者名	柴秀穂 井沢はずき							
編集機関	箕輪町教育委員会							
所在地	長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪10,291番地 (代) Tel0265-79-3111							
発行年月日	2012年3月23日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m)	調査原因
		市町村	遺跡番号	°'"	°'"			
上ノ平遺跡	長野県上伊那郡 箕輪町 大字 東箕輪2831番地 他	20383	121	35° 55' 42"	138° 00' 16"	2011.7.21 ~ 2012.3.23	80	水道管 設置工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
上ノ平遺跡	集落跡 城跡	縄文時代 中世	堀 郭 郭の法面		土器片 黒曜石片 陶器片		中世の城跡	
要約	これまで「五の堀」があると伝えられていた場所に、堀の痕跡（斜面）が確認され、「五の堀」の実在が確認できた。また、「五の堀」の内側の生活面（「四の郭」の南東端部）も確認された。なお、「四の堀」は確認できなかった。							

上ノ平遺跡

平成23年度南小河内区水道管設置工事に伴う
緊急埋蔵文化財発掘調査報告書

平成24年3月発行

編集・発行 長野県上伊那郡箕輪町
教育委員会

印 刷 龍共印刷株式会社

